

# 鳥海物語⑤ (全6回)

## — 安倍氏統治期 —

平谷 美樹

わたしは鳥海柵の段丘である。安倍軍と朝廷軍は鬼切部で戦った。そして安倍軍は勝利した。

朝廷は源頼義を陸奥守に任命し多賀城へ送った。安倍氏の討伐が目的であったが、天皇の母が病気になる、その平癒祈願のために大赦が行われて安倍頼良の罪は許された。

頼良は、陸奥守源頼義の名と読みが同じなのは不敬であるとして、自ら頼時と改名した。

しかし、平和は数年しかもたなかった。源頼義は、陸奥守の任期の終了が迫ると、頼時の息子である安倍貞任が家臣を殺したと難癖をつけ、その身柄を引き渡すよう要求した。むろん、頼時は拒否した。

源頼義は他の俘囚の豪族たちを味方に引き入れて、頼時討伐を計画した。

それを察知した頼時は、裏切ろうとしている豪族たちを説得しようとして、出かけていく。しかし、旅の途中で隠れていた豪族の兵に矢を射られ、瀕死の重傷を負う。

頼時はわたしの上に建つ鳥海柵まで帰り、力つきて息を引き取った。主を失った人々の悲しみが、わたしの上に渦巻いた。

朝廷軍との戦いが再開された。

朝廷軍は、出羽国の清原氏と手を組み、安倍氏を攻めた。まず、小松柵が落ち、衣川関が落ちた。

安倍貞任率いる軍は鳥海柵に退くが、鳥海柵で戦は起こらなかった。安倍軍はそのまま北へ敗走するのである。

不思議なことに無人の柵には美酒を満たした数十の甕があった。柵を占領した源頼義は、「鳥海柵の名は聞いていたが、初めてここに入った」と嘆息を漏らしている。難攻不落の砦として名前が知れていた鳥海柵を、なぜあっさりと捨てて行ったのか、その謎がとけたならば、ぜひとも教えて欲しい。

安倍氏は厨川柵で滅んだ。鳥海柵の主、宗任は捕らえられて都へ送られた。その後、四国、九州に流され、祖国から遠く離れた地で没した。